



前列左より、橋右之輔・左近・橋田武志・右橋、後列左より、右朝・右門・右藤・右栄・右善与のみなさん。(橋田寄席文字教室)にて

「お客さま」

橋田武志 橋右之輔

寄席になくてはならぬものはいろいろありますが、寄席文字もその一つでしょう。寄席文字がなかったら寄席はどんなに寂しくなってしまうのでしょうか。寄席が一つの文化であるのと同じように、寄席文字も一つの文化なのだと思います。その寄席文字を一身に担っているのが橋右近一門の方々。もともと寄席文字は、故・橋右近師がビ

ラ字をもとに独自の工夫を加えて創始したものの、右近師さまとは、一門の方々が悪きんで盛り上げて今日に至っています。

そこで今回は、上野大空堂で開かれている「寄席文字教室」にお邪魔して、右近一門がいまどんな活動をしているのかということについて伺いました。ご出席いただいたのは、右近師の高弟である橋左近・橋右橋・橋右藤・橋右栄の師匠方です。

寄席文字から寄席へ

—— 右近師匠がおじくなりになって何年になりにますか？

右近 栄年七徳忌です。から、早いんですね。

右橋 九五年が過ぎて六年目に入ったんですね。

左近 あれぐらいの二階齢になると、みづうは名譽風ということで置物みたいなになってしまっただけで、師匠はそういうのは性に合わなかったらしくて、自分で作り直して上げたものだから、満足のことばをいってという姿勢を最後まで保っていました。たまたまに若く見えましたね。

右藤 ほんとは最後まで現役のままでしたね。

右橋 ただどこかでみんなに引き継ごうっていう雰囲気は、ちよつとずつ見せていました。これは誰に、あれは誰に、というくらいに。

右近師匠は「二代目兼古庵」と称して寄席資料のコレクションをされていましたが、そのコレクションは今はいない。

右橋 娘さんのお婿さん・祖田武志氏が「三代目兼古庵」を襲名して、管理・運営・補充を考えて下さるということになって、いるんです。敬遠してしまふのが一番困りますからね。

現在、右近一門としてはどういう活動をやっているんですか？

右藤 寄席文字教室は相変わらずやっています。むしろ師匠がいると三教室あるんです。すいませも開業だけでも三教室あるんです。ほかに大阪・奈良・福徳にもあるんです。

左近 東京近郊で毎日どこかで教室が開かれているってことですか？

右橋 地域地域でそれだけ人が来てくれるってことがありがたいですよ。だから新年会をやるってことですよ。

一五〇人の大宴会になっちゃうんです。

生徒さんはどんな目的で寄席文字教室に来るんですか？

左近 この字を覚えて生活の一助にしようっていう人じやなくて、どちらかといえば「変わったレタリングを楽しもう」ということが一つ、それから教

室に行くことで落語ファン、寄席ファンとしての連帯を感じる。そこでなにか寄席についてのニュースが聞けたり、ということもあるようですね。

右橋 勉強会はそうですけど、カルチャースクールの生徒さんは、珍しいものをやってみたいというだけで来ます。われわれはそういう人たちが「客」にしたらやうなんです。(笑)

—— 客っていうのは、つまり寄席ファンということですか？

右橋 そうです。自分たちのお客じやないですよ。(笑)

右藤 昔は落研の生徒さん、落語好き寄席好きの右橋さんが、寄席文字を習いに来てたんですよ。ところが最近では、寄席に行つたことも見たこともないという人が、面白そうだから寄席文字をやってみよう、という人が結構多いんですよ。だから、そういう生徒さんには、「縁あって寄席文字に興味を持っていただいたんだから、寄席にも興味を持ってください。実際に足を運んでください」と言わなくて、できれば好きな五人さんをつくとって追っかけになってみてください。遠く世界が広がりますよ。(と案内したりして)。

一門の運営は合議制で

右橋 新宿「米虎堂」の仕事は大將(右近師)が全部やつたんです。師匠からの引継ぎで、メインの仕事、十日ごとに変わるものについては全部総領(右近師)が書いてるんです。ほかに一年にいくつべん色紙交換のものがあつて、それはみんな自分で分けてやらせてもらうんです。みんなあそこを見て育ってきたんで、それをやらせてもらえるというのわかれわれにとつて大変なステータスなんです。誰がこれを書いてるかというのには、皆さんわかんないと思うので、紹介しましよ。毎年ローテーションを組んでるんで、今回の担当ということなんですが、来年のお正月からこれが並びます。